

支援活動は自分の生き方 引退はありません

# ハイチ復興のために神様とともに

シスター須藤昭子は、現在85歳。35年以上もハイチで支援活動に携わり、今もハイチで活動を続けている。

シスター須藤が生まれたのは1927年、太平洋戦争が本格的になる前の朝鮮半島であった。太平洋戦争が激しくなり、女学校2年生の時、父母の故郷の広島に戻り、卒業後父の勧めで医師を目指す。1944年、大阪女子高等医学専門学校に入学。この頃、献身的に日本の結核患者を治療する外国人シスターを目の当たりにし、感銘を受け、自分も医師になって修道会に入ることを決意する。1950年に医師国家試験に合格し、クリスト・ロア病院(現・上ヶ原病院)に結核の専門医として勤務。1953年にクリスト・ロア宣教修道女会に入会。その後、20年以上日本で結核の診療に携わる。

そんなシスター須藤がハイチと出会ったのは、カナダでフランス語の勉強をしていた50歳直前のことだった。ハイチの成人の死亡原因は結核が第1位という記事を見て「私にもなにか出来るはず!」とハイチ行きを決意。1977年にハイチ国立シグノ結核診療所に赴任した。当時のシグノ診療所は、国立診療所とは名ばかりで、いわば避難所。医療設備もないところであった。そのため、ハイチに着いてからのシスター須藤の活動は診療だけでなくとどまらず、診療所の設備の整備も使命となった。このような活動を知った日本を含む海外から

の援助もあり、診療所の設備が整ってきた1982年、シスター須藤はシグノ結核診療所の所長に就任。その後は国際所長として、2008年81歳までシグノ結核診療所で活動を続けた。

しかし、シスター須藤の支援活動は医療だけでなく終わらなかった。荒廃したハイチの土地、貧困するハイチの人々を見て、「問題の根本解決には農業と植林が必要」と実感し、75歳にして農業の勉強を始める。自ら体験したタイや日本の農業技術をハイチに伝え、病院を引退後、2009年以来、仲間と共に植林と農業の指導に取り組んでいる。

そんな中、たまたま一時帰国していた2010年にハイチ地震が発生。再びハイチに渡り、日本政府、国連機関、NGO団体と交渉し、シグノ結核診療所の再建に尽力。2011年に体調を崩し、一時カナダで療養後、再びハイチに戻り、85歳になった今も現役でハイチ復興の支援活動を行っている。

「ハイチでの支援活動は神様との共同作業」と表現する、シスター須藤が引退しない理由は、「自分の活動が職業ではなく、生き方だから」と言う。そんなシスター須藤の生き方はすでに伝説となっていると言っても過言ではない。ハイチの人々のためにも、この現在進行形の伝説がいつまでも続くことを願わずにはいられない。



■病院建設現場にて

■サナトリウムで患者さんと



■シスター須藤執筆の書籍



す どう あき こ  
**須藤 昭子 Akiko Sudo**

ハイチ国立シグノサナトリウム 医師・アドバイザー、クリスト・ロア宣教修道女会  
MD and Advisor at Haiti National Sanatorium / Missionnaires du Christ-Roi

1927年生まれ。1944年大阪女子高等医学専門学校(現・関西医科大学)に入学。1950年に第8回医師国家試験に合格。クリスト・ロア病院(現・上ヶ原病院)に結核の専門医として勤務。1953年にクリスト・ロア宣教修道女会に入会。20年以上に亘り日本で結核治療に携わる。1977年、50歳になる直前にハイチにある国立シグノ結核診療所に赴任。1982年に所長となる。2008年に病院から引退。その後は農業技術学校の設立に向けて取り組んでいる。2009年に日本に一時帰国するものの、2010年のハイチ地震を受けてハイチに再び戻り、現在も支援活動中。

推薦者

姫井 由美子 前参議院議員

医療従事者部門  
(国際)  
Health Provider